中等教科

明治文典

再訂

巻之二

375.9
Ha7
資料室

41845
教科書文庫
4
815
44-1909
20000
26445

資料室
395.9
H27

明治四十二年三月十一日
文部省檢定濟
中學校、師範學校國語科用

中等教科明治文典

文學博士芳賀矢一著

再訂

卷之二

東京
合資會社 冨山房藏版

廣島大學 教 26445 圖書

卷の二教授上の注意

一、第一篇に於て品詞箇々の分別を敎へたるを以て、本篇に於ては各品詞相互の關係を學ばしむるを主眼とし、體言及び用言と助詞との連結、用言と助動詞との連結を敎へ、最後に體言と動詞との關係を說きて、動詞の自他、主語、客語、補語の性質に及び、第三篇の文章論に接續せしむ。

二、用言と助動詞との連結は之を活用連語と稱し、助動詞を時、法、式、相の四種に分ち、尙指定、比較の助動詞をも加へてその連結を表示せり。活用連語の表は一見甚だ複雜なるが如くなれども、一を以て他を推すべきが故に、實際上、生徒の之に習熟せんこと極めて容易なりと信ず。總合したる形に於て活用連語を學ばしむること、本書の目的とする所なれば、敎授者諸君はよくこの意を諒とし、常に活用連語の全體を口語と對照して敎授せられんことを望む。

三、助動詞中に於て今文に用ゐざるらん、めり、まし、てん、なん、等の如きものは

すべて之を中古文法に讓り、四年級以上に教授することゝなせるは編纂の趣旨にいへるが如し。

四、助動詞連結の部に於て文法上許容にわたることは其處々に注意を與へ、卷末に文部省の文法許容に關する規定を附錄とし、以て學生の參照に資せり。教授者は先づ從來の規則を教へ、然る後許容の事に關して注意を與へられんことを望む。

五、本書に於ける客語の意義は少しく從來のとは異る所あり。從來の文法書は一に西洋文典に據り、他動詞の目的語のみを客語と稱したり。本書に於ては國語の性質に鑑みて、他動詞の第二客語、受身、使役の場合にあらはる動作者、動作命令者の如き、皆之を客語と定めたり。故に客語には「に」或は「より」の助詞を伴ふものあり。この相違に注意あらんことを望む。

中等教科

明治文典（再訂）卷之二目次

第二篇　品詞相互の關係

第一章　體言と助詞との連結……一
練習一、……九
第二章　動詞活用の名稱及び意義……九
練習二、……一三
練習三、四……一四
第三章　形容詞（附形容動詞）活用の名稱……一五
第四章　助動詞活用の名稱……一七
第五章　動詞と時の助動詞との連結……一九
第六章　動詞と法の助動詞との連結……二三

第七章　動詞と否定の助動詞との連結……二七
第八章　動詞と受身使役の助動詞との連結……三〇
練習五……三二
練習六……三三
第九章　動詞助動詞連結の誤謬……三三
練習七……三九
第十章　形容動詞と助動詞との連結……四一
練習八、九……四三
第十一章　時、法、相の意義の轉換……四四
練習十……四六
第十二章　指定及び比較の助動詞の連結……四七
第十三章　活用連語……四九

練習十一……五一
練習十二……五一
第十四章　活用語と助詞との連結……五二
練習十三……五八
第十五章　用言の慣用語句……五九
練習十四……六三
第十六章　體言と用言との關係——主語、述語
客語……六四
練習十五……六七
練習十六、十七……六八
第十七章　補語……六八
練習十八……七二

附錄
活用連語表第一
活用連語表第二
文法上許容に關する事項

中等教科明治文典（再訂）卷之二目次終

廣島大學圖書之印

中等教科

明治文典（再訂）卷之二

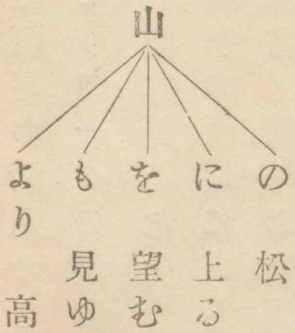
文學博士　芳賀矢一著

第二篇　品詞相互の關係

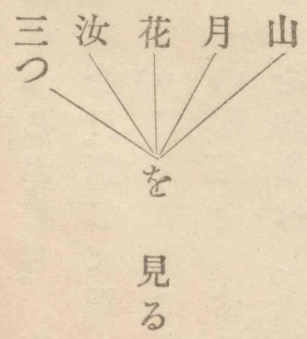
第一章　體言と助詞との連結

〔一〕

（イ）



（ロ）



體言には語尾の活用なきこと、既に學べるが如し。右の例の(イ)によりて、一つの體言が色々の場合に應じて種々の異りたる助詞に連ることを知るべく、又(ロ)によりて、これ等の助詞は體言の活用にあらざれば、同一の關係を示すには如何なる體言も同一の助詞に連ることを知るべし。

〔三〕(1)(の)　樹の枝　三つの柿　汝の母

(2)(が)　我が家　三が一　君が代　君が歸るを送れば

(3)(を)　書を讀む　文を作る　五つを與ふ

(4)(に)　先生に問ふ　汝に與へん　二つに割る　六時に起く

(5)(へ)　東京へ行く　諸方へ通知す　前へ進む

(6)(より)　六時より始まる　獨逸より歸る　山より高し

(7)(まで)　九時まで勉强す　神戸まで行く

(8)(と)　酒と煙草とは衞生に害あり　三と二と合すれば五となる。

助詞には體言と體言との間の關係を示すものあり、體言と用言との關係を示すものあり。

以上の助詞は最も普通に用ゐらるゝものにて、大方は日常の口語にも用ゐらるゝものなり。

これらの助詞につきて注意すべきこと左の如し。

〔三〕太郎が球を投げる(口語)　太郎球を投ぐ(文語)

人が枝を折る(口語)　人枝を折る(文語)

口語にてかく用ゐる「が」は文語にて全く省くべきものとす。但し

人が汝を愛するのを知らない

君が歸るのを送れば

といふ如く、口語にて下にのを添へたる語句の上にかゝるときは、文語にても、

人の汝を愛するを知らず

君が歸るを送れば

の如く「の」或は「が」を附加ふるなり。

君が歸りし日

の如く、下に體言ある時も同樣なり。

〔四〕東京に在り　東京へ行く

日西に沒す　船西へ行く

「に」は時間にもせよ、場所にもせよ、或定まりたる一點を示すに用ゐ、「へ」は方向を示すに用ゐる。この區別は、口語にては混同して用ゐらるゝこと多し。

〔五〕漢書と史記の列傳とを讀む

漢書と史記との列傳を讀む

「と」は事物を並べて指定する助詞なれば、その並ぶる體言の下に一つづつ添ふるものとす。右の例を見て、その異同を知るべし。口語にては下のとを省くこと多し。

（注意）附錄文法許容に關する事項第十三項を參照せよ。

〔六〕(1) 花は櫻木人は武士

(2) 舜も人なり我も人なり　しゅん

(3) これぞ日本一の名馬
(4) 生還するもの三人のみ
(5) 祝ふ今日こそ樂しけれ
(6) 鳥すら恩を知る
(7) 雨降り風さへ吹く

右の中も、はの二つは口語にも普通に用ゐれば明瞭なるべし。ぞ、こそ、のみは共に多くの中にて殊に一つの事物に重みを置きていふときに用ゐる助詞なり。すらは物を比較して輕きものを擧ぐるとき用ゐ、さへはあるが上に物の添はる意をいふとき用ゐる。口語のさへは文語のすらを用ゐるべきときに用ゐらるゝこと多し。

この種類の助詞は、文の中より省きても、文の意味に格別の

變化を起さず。

〔七〕 雲か山か吳か越か
人やさき我やさき
蝶よ花よと育つ
さても降つたる雪かな

か、やは疑問、よは呼びかけ、感動、かなは感動に用ゐる。か、やも亦感動に用ゐることあり。

〔八〕 これをば見よ
我には許せ
山よりも高し
何處までも見ん
これぞと思ふ

われこそは無官の大夫敦盛

右の如くいくつもの助詞の重り合ひて用ゐらるゝこと多し。かゝる場合には、それ〴〵の助詞の意味を重ねたるものなり。

〔九〕口語にて綴る

一錢とでもなし

人にして人に非ず

人として鳥に如かざるべけんや

義經をして平氏を討たしむ

右の如く、で及びしては直接に體言につゞかず、既にに、と又はをに連りたる體言につゞく。にて、にしては口語の「で」「であつて」の義なり。

模範活用

往めゝ

練習一、左の助詞を用ゐて短文を作れ

よりは　をも　よりも　までも　すらも

のみは　へも　には　にも

第二章　動詞活用の名稱及び意義

〔一〇〕動詞にはそれ〴〵語尾の變化即ち活用あり。これより、その活用の名稱と意義とを學ばん。

奈行變格活用の動詞は六つの活用形を有するものなれば、之によりて說明するを便利とす。

第一活用形の「死な」は「死なば」と用ゐられて、未だ成立たぬことを假にいふ形なれば、未然形といふ。

第二活用形の「死に」は「死に損ふ」「死に難し」の如く、直に他

の動詞又は形容詞、即ち用言に連る形なれば、連用形といふ。

第三活用形の「死ぬ」は「人死ぬ」の如く言止むる形なれば、終止形といふ。

第四活用形の「死ぬる」は「死ぬる人」「死ぬる時」の如く、體言の上につゞく形なれば、連體形といふ。

第五活用形の「死ぬれ」は「死ぬれども」「死ぬれば」の如く、或條件の已に成立せるを許していふ時に用ゐる形なれば、已然形といふ。

第六活用形の「死ね」は命令をいふときに用ゐる形なれば、命令形といふ。

奈行變格には以上六つの活用形あり。同一の方法を以てこの六種の形に他の活用の動詞をあてゝ考へ見よ。

〔二二〕四段活用の動詞には四つの活用形あるのみなれば。讀まば、讀み難し、讀む、讀む人、讀めども、讀めとなりて、終止と連體とは同形、已然と命令とは同形なるを知る。

未然	連用	終止連體	已然命令
よま	よみ	よむ	よめ

〔二三〕良行變格活用の動詞も、同じく四種の活用形を有し、「あらば」「あり難し」「ある」「ある人」「あれども」「あれ」となりて、連用と終止と同形を有することのみ、四段活用に異なり。

未然	連用終止	連體	已然命令
あら	あり	ある	あれ

〔二三〕上二段活用、下二段活用の動詞には四種の活用形あり。

第一活用に於て、未然、連用、命令の三つを兼ぬ。但し命令には「よ」といふ助詞を付くべし。

未然連用命令	終止	連體	已然
おき	おく	おくる	おくれ
すて	すつ	すつる	すつれ

〔一四〕上一段活用、下一段活用の動詞は三種の活用形あるのみなれば、第一活用にて三役を兼ぬる外、第二の活用形にて、終止、連體の二役を兼ねたり。命令に「よ」を添ふること前に同じ。

未然連用命令	終止連體	已然
み	みる	みれ
け	ける	けれ

〔一五〕左行變格、加行變格活用の動詞は、五つの活用形を有するを以て、第一の未然形にて命令を兼ぬるのみなり。但し命令に「よ」を添ふること前に同じ。

未然命令	連用	終止	連體	已然
感ぜ	感じ	感ず	感ずる	感ずれ
こ	き	く	くる	くれ

（注意）（一）口語動詞の活用には終止連體の區別なきを以て、文語に於てもこの二者を混同し易し。注意すべし。

（二）動詞の連用形は名詞となる形なり。

練習二、左の活用形の名稱を問ふ。

食は　信じ　願ふ　見え（下二）
立ち　起くる　得る　耻ぢ
棄つ　燒くる　流す　書け
及第す　卒業せ

練習三、左の動詞の六種の活用形を記せ。

持つ　禁ず　堪ふ　著る
悔ゆ　止む

練習四、左の文に誤あらば正せ。

（イ）私慾を制すことは難く、放逸に流ることは易し。
（ロ）今や秋高く、馬肥ゆ時なり。

人、才智なきときは、業を執り身を立つと能はず
（ハ）疾病流行して、死すもの多し、
（ニ）感慨極りて涙のみ流るゝ。
（ホ）金鞍の公子は之を以て輿車の代とし、或は之を競爭せしめて
（ヘ）娯樂の用に供する。

第三章　形容詞（附形容動詞）活用の名稱

〔二六〕前課に於て學びたる六種の活用に形容詞をあてゝ考へ見よ。

善くば……未然
善くあり……連用
善し……終止
善き人……連體

善けれども……已然

故に形容詞の四つの活用形に於ては、未然形にて連用を兼ぬることを知る、形容詞には命令形の活用なし。

未然連用	終止	連體	已然
よく	よし	よき	よけれ

（注意）口語の形容詞活用には終止連體の區別なし。

〔一七〕形容動詞はいづれも良行變格と同じく活用するを以て、其役目の分擔も全く良行變格の活用に同じ。これには命令形もあり。

未然	連用終止	連體	已然命令
よから	よかり	よかる	よかれ
詳なら	詳なり	詳なる	詳なれ

整然たら　整然たり　整然たる　整然たれ

◎注目す必要

第四章　助動詞活用の名稱

〔一八〕第一篇に於て助動詞の活用には動詞に等しきもの、形容詞に似たるもの等あることを學べり。故に助動詞も亦それ〴〵の動詞、形容詞と同じく、各段の名稱を有す。

	未然連用命令	終止	連體	已然
(一)	れ	る	るる	るれ
(2)	られ	らる	らるる	られ
(3)	せ	す	する	すれ
(4)	させ	さす	さする	さすれ
(5)	しめ	しむ	しむる	しむれ

下二段活用に等しきもの

(二)　未然　連用　終止　連體　已然　命令

(1)　なら　なり　なる　なれ

(2)　たら　たり　たる　たれ

(3)　ら　り　る　れ

(4)　べから　べかり　べかる　べかれ

良行變格活用に等しきもの

(注意)　□は現今用ゐぬ印なり。第一篇にいへる如し。

(三)　未然　連用　終止　連體　已然

(1)　可く　可し　可き　可けれ

「2)　如く　如し　如き　如けれ

形容詞の活用に似たるもの

(四)　未然　終止　連體　已然

ん　め

(五)　未然　終止　連體　已然

(六)　せ　未然　連用　終止　き　し　しか

ず　ぬ　連體　ね　已然

(注意)　英語の直譯にしの連體形を終止形の如く用ゐる風あり。なるべくは用ゐざるがよし。

附錄文法許容に關する事項第三項參照。

第五章　動詞と時の助動詞との連結

(動詞の時)

〔三〇〕「讀ま」は未然、「讀み」は連用、「讀む」は終止、連體、「讀め」は已然、命令なり。今左の如く助動詞と連りたる例を見よ。

(1)　讀まる

(2) 讀みたり
(3) 讀むべし

(1)は受身の意味をあらはして、未然の意なし、(2)は「たり」の助動詞につゞきて用言には連らず、(3)は「べし」の助動詞につゞきて終止せず。これ等の例にて、未然、連用以下の名目は活用の一つの功用につきての名なるを知るべし。動詞の種々の活用形には、尚助動詞に連るべき他の役目あり。助動詞は獨立しては其意味をなし難く、動詞は助動詞の助なければ種々の作用をいひあらはし難し。故にこの各種の活用形より、種々の助動詞に連りて、各種の連結を形造るなり。以下次第に之を說かん。

〔三〕雨やむ　鳶とぶ

「やむ」「とぶ」の如き單純なる動詞にては、現在に起る動作をいひあらはすことを得れども、過去に起りし動作、又は未來に起るべき動作をいひあらはすこと能はず。故に時の助動詞を附加へて、動作の時間の關係を明瞭にす。

(イ) 雨やみたり。
(イ) 雨やめり。
(ロ) 雨やみき。
(ハ) 雨やまん。
(ニ) 雨やみたりき。
(ホ) 雨やみたらん。

(イ)は動作の今正に終れることを示す。故に現在完了の時といふ。(ロ)は動作の過去に終りしことを示す。之を過去

の時といふ。(ハ)は動作の未來に起るべきことを示す。之を未來の時といふ。(ニ)は完了の時と、過去の時と重なりたるもの、(ホ)は完了の時と、未來の時と重なりたるものにて即ち(ニ)は過去の或時に於て動作の已に完了せることを示し、(ホ)は未來のある時に於て、動作の完了し居る事を豫定して示す。故に過去完了、未來完了の時といふ。是に於て動詞の時には左の六種の區別あることを知る。

(1) 讀む　現在

(注意) 現在は過去未來等に對していふ。時をいふ必要なき場合には、時の助動詞を採らざれば同じくこの形を用ゐる。以下皆之に倣ふ。

(2) 讀みたり　現在完了
讀めり

(3) 讀みき　過去
(4) 讀みたりき　過去完了
(5) 讀まん　未來
(6) 讀みたらん　未來完了

(注意) 「やみぬ」の如く用ゐるぬも亦完了の時を示せども、現代の文には終止形の外殆ど用ゐず。

第六章　動詞と法の助動詞との連結

(動詞の法)

(三三) 前課に於て動詞の時を示す方法を學べり。然るにこれにては動作をありのまゝに述べて、たゞ動作の起る時間を明瞭にしたるのみ。故に「讀むだらう」の意にて推

量をあらはし、「讀む筈だ」の意にて義務をあらはす如き、種々の意をあらはすには、法の助動詞との連結を形造らざるべからず。

(イ) 讀むべし。　讀むだらう　推量の法
(ロ) 讀むべし。　讀む筈だ　義務の法
(ハ) 讀むべし。　讀むことが出來る　能力の法
(ニ) 讀むべし。　讀め　命令の法

べしを附加へて右の如き種々の意味を示すことを得。

(注意) 命令法は「讀め」といふ命令形にてもいひあらはし得れども、「讀むべし」とべしを附加へてもいひあらはし得るなり。

(イ) 推量の法　(四つの時)

〔三三〕「明日は雨降るべし」「明日は雨降るなるべし」といへば「雨が降るだらう」といふ推量をあらはす。推量の法にはべし又はなるべしを添ふるなり。之を時にあてゝ考へよ。

現在	讀むべし	讀みたるなるべし
	讀むなるべし	讀めるなるべし
過去	讀みしなるべし	讀みたりしなるべし
過去完了		

(注意) ロ語にては、現在完了、過去、過去完了の區別なし。

推量には右の如く四つの時あり。未來の時なし。

(ロ) 義務の法　(三つの時)

〔三四〕「丁年に達すれば兵役に服すべし」といへば「服す筈だ」「服さねばならぬ」といふ義務の意味をあらはす。

現在	讀むべし。	讀む筈だ
過去	讀むべかりき	讀む筈であつた

未來　讀むべからん（べけん）　讀む筈だらう

右の如く三つの時ありて、完了の時なし。

（注意）べからんは約りてべけんとも用ゐらる。

（ハ）能力の法（三つの時）得

〔二五〕「六尺の屏風も躍らば越ゆべし」は「越えることが出來る」といふ能力の意を示す。これにも義務の法と同じく三つの時あり。

現在　讀むべし。　讀むことが出來る

過去　讀むべかりき。　讀むことが出來るのであつた

未來　讀むべからん（べけん）　讀むことが出來よう

（注意）これは助動詞にて能力をいふ場合なれども、現今の文にては「讀み得」「讀むことを得」の如く得といふ動詞を以て能力を示すこと多し。（第十五章參照）

（ニ）命令の法（一つの時）

〔二六〕「規則を守るべし」といへば「規則を守れ」といふ命令の意に用ゐたるものなり。この場合にはたゞ一つの時あり。

現在　讀むべし。

命ぜられたる動作は未來に起ることなれども、命令の動作は現在なり。過去又は未來の命令なし。

第七章　動詞と否定の助動詞との連結

（動詞の式）

〔二七〕「これ迄學べるはいづれも動詞の肯定をいふ場合なり。動作を打消すにはず又はざりの助動詞を用ゐるなり。

この關係を示せば

讀む―肯定の式　讀まない

讀まず―否定の式　讀まなかつた

となる。之を時にあてゝ考へ見よ。

現在　讀まず。　讀まざりき。　讀まなかつた

過去　讀まざりき。　讀まなかつた

未來　讀まざらん。　讀まなからう

（注意）現今の文語には完了の時なし。

〔三八〕更に之を法にあてゝ考へよ。

（イ）推量の法

現在　讀まざるべし。　讀まないだらう

讀まざるなるべし。

過去　讀まざりしなるべし。　讀まなかつただらう

（ロ）義務　（ハ）能力の法

現在　讀むべからず　（ロ）讀んではならぬ　（ハ）讀めん

過去　讀むべからざりき　（ロ）讀んではならなかつた　（ハ）讀めなかつた

未來　讀むべからざらん　（ロ）讀んではいけなからう　（ハ）讀めなからう

（ニ）命令の法

現在　讀むべからず

〔三九〕義務を示すものに限り一層其意を強くするため、二重の打消を取ることあり。二重の打消なれば意味は肯定になるなり。

現在　讀まざるべからず　讀まなくてはならぬ

過去　讀まざるべからざりき　讀まなくてはならなかつた

未來　讀まざるべからざらん　讀まなくてはならぬだらう

〔三〇〕 助動詞のまじは推量の法と否定の式とを兼ねたるものにして、口語のまいに當る。

第八章　動詞と受身、使役の助動詞との連結

（動詞の相）

〔三一〕 これまで學び來れる動詞の連結は、時のあらはし方、法のあらはし方、否定のあらはし方にて、動作をなすかたにつきての種々の用法なり。然るに「人に打たる」「路に棄てらるる」の如くるらるの助動詞を添ふれば、他より動作を受くる受身の意をあらはし、「打たす」「棄てさす」「歸らしむ」の如くすさすしむを加ふれば、他に動作をなさしむる使役の意味をあらはし、「打たせらる」「棄てさせらる」「歸らしめらる」の如く「せらる」「させらる」「しめらる」を加ふれば、人に動作せしめらるゝ使役の受身を示す。之を動詞の相といふ。この關係を示せば。

(イ) 受身の相　　讀まる。　　讀まれる

(ロ) 使役の相　　讀ます　讀ませる

(ハ) 使役の受身の相　　讀ませられる

〔三二〕 使役相、受身相、使役受身相の動詞も亦時、法及び式の助詞に連ることを得。別表第一に就いて之を見るべし。

（注意）否定式の動詞の使役相となるものあり。その活用は第二表について知るべし。

練習五、左の動詞につきて、時と法との助動詞を連結せよ。

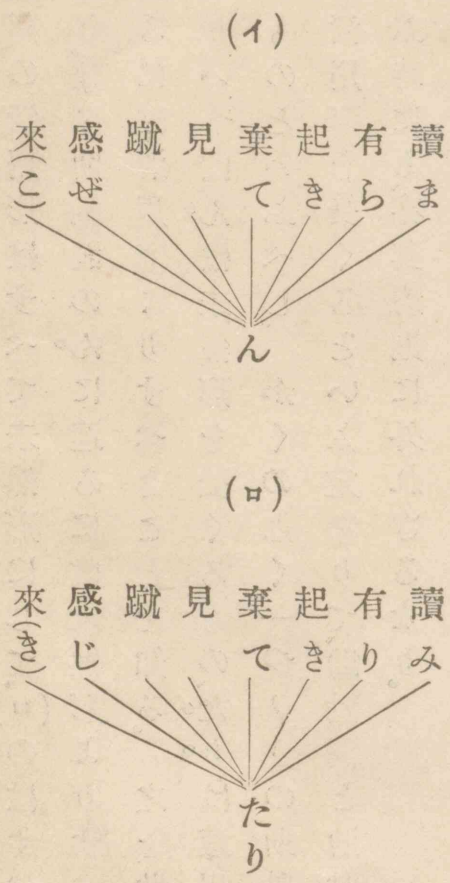
崩す　流す　言ふ

練習六、第一表により、左の動詞のあらゆる連結を示せ。

取る　知る　學ぶ

第九章　動詞助動詞連結の誤謬

〔三三〕是迄學び來れる如く、動詞は種々の助動詞と結付きて、時の差別をもあらはし、推量、義務、能力、命令等の法をもあらはし、否定の意をも示し、受身、使役、使役の受身等の相をも示すを以て、一つの動詞の下には、場合に應じて三つも四つもの助動詞の重り合ふことあり。かくて附錄の表の如き多くの言ひまはし方を得るなり。かく動詞の助動詞に連り、助動詞の他の助動詞に連るには其間に連結の規則ありて、整然として紊れざるなり。



（イ）の動詞の活用形はすべて未然形にして、（ロ）のはすべて連用形なり。故に助動詞のんに連るには未然形よりすべく、たりに連るには連用形よりすべきことを知る。之を助動詞の方よりいへば、んは未然形を受くるもの、たりは連用形を受くるものといふべし。かくの如く一つ〳〵の助動詞には何の活用形を受くるといふ定ありて、助動詞と助動詞と重り合ふ時にも、亦其規則に外れざるなり。

外國人等の始めてこの連結を學ぶ時には、非常なる困難を感ずべけれども、余等は自然に之を記憶して「讀まん」「有らん」を「讀むん」「有りん」ともいはず、「讀みたり」「有りたり」を「讀またり」「有らたり」などともいはず。いくつもの助動詞の連結する場合にも相互の連結を誤ることは極めて稀なり。

今左に連結の誤り易き場合の二三を注意すべし。

〔三四〕　書けり　死ねり　感ぜり

右の如く完了時の助動詞「り」は四段活用、奈行變格活用、左行變格活用の動詞に限りて其え列の音より連るものなり。然るを下二段活用にも亦え列の音あるを以て、堪へり、受けりの如く誤り用ゐることあり。

（注意）良行變格より、「居れり」「異なれり」と用ゐるをも從來は誤りとせり。（文法許容に關する事項第一項及び第四項を參照せよ。）

〔三五〕　及第しき　及第せしかども

時の助動詞「き」は連用形を受くるものなれども、左行變格活用の動詞に限り、其未然形よりし、しかの兩形に連ること右に示すが如し。故に及第しゝ人、及第しゝかどもなど書

くは誤なり。

四段活用の動詞よりこのし、し、かに連るに押せし、殘せしなど書くは左行變格活用又は左行下二段活用の接續と混同せるものなり。目下盛に行はる。

（注意）附錄文法許容に關する事項第八項を參照せよ。

〔三六〕落つべし　聞ゆべし　醫ずべし

「べし」「べからず」は良行變格及び良行變格と同樣に活用するもの丶外は、すべて右の如く終止形より連るものなり。然るを口語にて終止連體の差別なきが爲、落つるべし聞ゆるべし、醫ずるべし。などの如く連體形を誤り用ゐることあり。

〔三七〕落つるなり　聞ゆるなり　醫ずるなり

落つるなるべし　聞ゆるなるべし　醫ずるなるべし

なりは連體形に連るものにて、從つて「なるべし」も亦連體形に連るべきものとす。然るを〔三六〕の場合と反對に、「落つなり」「落つなるべし」「聞ゆなり」「聞ゆなるべし」「感ずなり」「感ずなるべし」の如く終止形を誤り用ゐる事あり。

〔三八〕落つまじ　聞ゆまじ　醫ずまじ

「まじ」も「べし」と同じく終止形に連るものなり。故に「落つるまじ」、「聞ゆるまじ」、「感ずるまじ」など連體形を用ゐるは誤なり。

〔三九〕讀まる　起きらる　死なる　棄てらる　有らる　見らる

讀ます　起きさす　死なす　棄てさす　有らす　見さす

感ぜらる　感ぜさす

受身の助動詞にはる、らるの二つあり、使役の助動詞にはし。むの外にす、さすの二つあり。いづれも未然形より連るものにして、る、ずは未然形にあ列の音を有する動詞に連り、らる、さすは其他の動詞に連ること右に示すが如し。（せらる、させらる亦之に準じて知るべし。）

故に左行變格より受身、使役に續きて、感ぜらる、感ぜさすといふを當然とす。然るに近來は感ぜさる、感ぜさすの如く用ゐること多し。

（注意）附錄文法許容に關する事項第五、六項を參照せよ。

使役の助動詞しむは亦未然形を受くるものなれば、「見しむ」「得しむ」といふべきを、今は「見せしむ」「得せしむ」といふこと多し。

（注意）得しむは附錄文法許容に關する事項第七項を參照せよ。

練習七、左の文の動詞助動詞連結の誤を正せ。（現今許容せられたるものは其旨を答へよ。）

〔三四〕〔三五〕

（イ）勉强しゝ甲斐ありて首尾よく及第せり。
（ロ）一旦名聲を落せしが後之を回復せり。
（ハ）人情風俗は時代と國土とによりて異なれり。
（ニ）本校所定の學科を修め正に其業を卒へり。
（ホ）尊王の論盛にして幕府遂に倒れり。
（ヘ）一日も光陰を徒費しゝことなし。
（ト）海外に輸出しゝ總額は三百萬斤に超えりといふ。

〔三六〕〔三七〕〔三八〕

(チ) 一覽せし人は東の入口より退場すべし。

(リ) 品物に手を觸るゝべからず。

(ヌ) この處塵芥捨てべからず。

(ル) これ學生のするまじき所業なり。

(ヲ) 猥に出入するべからず。

(ワ) 或は風呂を涌かし或は工場の蒸氣竈を熱する等その便利數ふるべからず。

(カ) 敵は必ず夜襲を企つなるべし。

〔三九〕

(ヨ) 敵の大隊は我軍に包圍されて全滅したり

(タ) 資金を給して其好む所を研究させたり。

(レ) 法皇忠盛に仰せて之を射せしめらる。

(ソ) 希望者には出席することを得せしむべし。

(ツ) 舊規則は今年限廢止さる。新規則は明年一月より實行さるべし。

(ネ) 諸藩に詔して之を議さしむ。

(ナ) 平家の大軍は殆ど鏖殺され且戰ひ且退きて篠原成合に到り、返り擊つて大に戰ふ。

第十章　形容動詞と助動詞との連結

〔四〇〕ら行變格と同じき活用を有する形容動詞は亦助動詞に連結して時、法、文相を有すること動詞の如し。

	(肯定)	(否定)
現在	詳なり	詳ならず
過去	詳なりき	詳ならざりき
未來	詳ならん	詳ならざらん

〔四一〕法を加ふれば。

（イ）推量の法

現在　詳なるべし　詳ならざるべし

過去　詳なりしなるべし　詳ならざりしなるべし

（ロ）義務　（ハ）能力の法

現在　詳なるべし　詳なるべからず

過去　詳なるべかりき　詳なるべからざりき

未來　詳なるべからん（べけん）　詳なるべからざらん

〔四二〕又使役の相を有することを得。

現在　詳ならしむ　詳ならしめず

現在完了　詳ならしめたり

過去　詳ならしめき　詳ならしめざりき

過去完了　詳ならしめたりき

未來　詳ならしめん　詳ならしめざらん

未來完了　詳ならしめたらん

〔四三〕使役の相も亦種々の法を有することを得。繁を避けてこゝに擧げざれば、類推して之を知るべく、疑はしくば第二表に就いて之を知るべし。

〔四四〕月明にして、星稀なり。

擧止閑雅にして、容姿美麗なり。

形容動詞は文の半途にあるときは、右の如く本のありに連らぬ形より、しての助詞に連ること多し。

練習八、左の連結の相、式、法を問ふ。

美しからず　強壯ならざるべからず

練習九、　なかりの形容動詞のあらゆる連結を示せ。

第十一章　時、法、相の意義の轉換

〔四五〕未來　讀まん……讀まう

未來完了　讀みたらん……讀んだらう

使役相の未來　讀ましめん……讀ませよう

能力法の未來　讀むべからん……讀める筈だらう

右の如く未來の時を示すすべての連結は、口語にても、文語にても、推量の法を示すにも用ゐらるゝなり。

〔四六〕推量の法　讀むべし　讀むだらう

推量の否定　讀まざるべし　讀まないだらう

右の口語に照しても明瞭なる如く、推量法は亦未來の時として用ゐらるゝことを知るべし。これ法の助動詞の時の助動詞に轉じたるものなり。

〔四七〕受身の相　讀まる　讀まれる

使役の受身の相　讀ませらる　讀ませられる

右の口語に照しても明瞭なる如く、受身、又は使役の受身は敬語として用ゐらるゝことを知るべし。又敬語は動詞の給ふを助動詞に用ゐて使役相の下につけ、

讀ませ給ふ

といふこともあり。古文にては敬語相のみにても敬語となるなり。

これ相の助動詞の敬語の助動詞に轉じたるものなり。

練習十、左の連結の意味を口語にて述べよ。

(イ) 佐藤先生は去年獨逸國より歸朝せられたり

(ロ) 新聞雜誌も備へありて、居ながら歐米各國の近狀も知らるゝなり。

(ハ) 書籍室は船の前方に在り。凡そ二十疊を敷くべし。

(ニ) 毎日千字づゝ書き出すべしと命ぜられたり。

(ホ) 今の境遇にて正式の學校に入學せんことおもひもよらず。

(ヘ) 蟻の擧動を觀察せよ。彼等の身長よりは幾十倍もあらんかと思ふ昆蟲をも運搬し行くなり。

(ト) 來十日午前八時御出門、陸軍士官學校へ行幸仰出ださる。

(チ) 昔フリードリッヒ大王この木の下にて民の訴を聞かれたりとて王の木の名あり。

第十二章　指定及び比較の助動詞の連結

〔四八〕 知りしなるべし

知りたりしなるべし

右の如く、推量の法にはなりの助動詞の用ゐらるゝことをいへり。元來この助動詞は勢を強め、或は指定する意味を有することを得るなり。左の例を見よ。

讀む……讀むなり

讀みたり……讀みたるなり

讀ます……讀まするなり

讀ませず……讀ませざるなり

讀まるべし……讀まるべきなり。
讀ませられざるべし…讀ませられざるべきなり。
美しかりき……美しかりしなり。
美しからざりき……美しからざりしなり。

連體形に接續することは(三八)にいへるが如し。この助動詞は亦普通の形容詞の連體形にも連る。

(四九) 正成は忠臣なり。
三つと二つとの和は五つなり。
舜も人なり我も人なり。
我は我なり彼は彼なり。

右の如く「なり」は體言の下にもつゞくことを知るべし。

(五〇) 父父たらざれども子子たり。

これは何たることぞ

右の如く「たり」は體言にのみつくものなり。

なり、たりの二つを指定の助動詞といふ。

(五一) 大女を見るが如し
花の如し

右の如く體言よりはがに連り、然る後比較の助動詞「如し」に續く。但し用言の場合にはがを省くこともあり。

第十三章　活用連語

(五二) 第五章以下動詞形容動詞と各種の助動詞との連結を學べり。以て助動詞の功用の甚だ大なるを知るべし、

而してこれ等各種の助動詞の重り合ふにも自ら一定の順序あり、必要ある場合にそれ〴〵の助動詞を採りて用ゐるものにして、しかも其順序を紊すことなし。此順序の如きも亦、吾等は自然に感得せるを以て、別に記憶する必要なし。

〔五三〕動詞又は形容動詞の下にいくつもの助動詞の重り合ひたるときは、之を引きくるめて一つの單純なる動詞若くは形容動詞と見做して取扱ふべし。而してその連結の最終にある助動詞の活用を以て、其活用と見做すべし。

左の例を見よ。

未然	連用	終止	連體	已然	命令
書かしめば	書かしめ	書かしむ	書かしむる	書かしむれども	書かしめよ
書かせたらば	書かせたり	書かせたり	書かせたる	書かせたれども	書かせたれ

書かれざらば　書かれず　書かれず　書かれざる　書かれざれども　書かれざれ

（注意）「論ぜずんば」、「聞くべくんば」の如く未然の場合、んを挿むことあり。これは單に口調の爲めなり。

用言と助動詞との連結せるものを活用連語といふ。

練習十一、左の活用連語の未然形、連體形、已然形を示せ。

論ぜざるべし　堪ふべからず

出發し給ふ　盛大なりしなり

感ぜしむ

練習十二、左の文に誤謬あらば指摘せよ。（許容せられたるものは其旨をことわれ。）

(イ) 大納言にして右大將を兼ねしめり。
(ロ) 馬尼剌市は一萬の西班牙兵に防禦されありといふ。
(ハ) 彼等が一致協力の力は甚だ強固なれば、之によりてわれ等には想像し得べからざる大事業をも成し遂ぐなり。
(ニ) 我東宮殿下のかしこくも天皇陛下の聰明に似させ給へて、御克己の德に富ませ給ひることは、承り奉る毎にいとゞ忝くこそ覺ゆれ。
(ホ) 御後影の見ゆ限り目送し奉りて本の席にかへりしが、さて見れば、かのわが跨火にしゝ小火鉢は依然としてそこにあれり。

第十四章　活用語と助詞との連結

〔五四〕

の花を見るの記　何ぞ思はざるの甚しき
が信ずべきが如し　甚しかりしが如し
を知らざるを知らずとせよ　論ぜざるを得ず
に忍耐の久しきに驚く
へ餘り疎遠なるへは通知せず
より日の出づるより
まで日の沒するまで
と愛すると愛せざると
は今の世に生れたるは大なると小なると
も行くも歸るも別れては
ぞ何故なるぞ
こそ言はざるこそよけれ

のみ　馬前まざるのみ。
か　行くか歸るか。　旅順は何時陷落すべきか。
や　余の始めて學校に入學するや。
よ　面白き事を見たるよ。　この繪のうつくしきよ。
かな　いふべきかな。

右の如く、體言の下につきたる助詞(第一章參照)はすべて活用語の下にも添ふことを得るなり。

〔五五〕花咲かば告げん　無くば幸なり
樂あれば苦あり　遠ければ行かず
悔ゆれども及ばず　廉なれど品惡し
如何なる事ありとも　如何に美麗なりとも
花咲きて散る　上書して諫む

右の「ば」「ど」「ども」「とも」「て」も、體言には附屬せざる助詞にて用言、活用連語のみに附屬す。

ばは前後相應ずることに用ゐ、どども、ともは前と後と相背くときに用ゐる。ては前と後とを接續するものなり。

(注意)　ども、ともを用ゐるべき所にもを用ゐる事今の文に多し。

(注意)　附錄文法許容に關する事項第十一及び第十五項を參照せよ。

〔五六〕終日待ちたるが何の音便もなかりき
日はまだ暮れざるにはや暗くなれり
今日降るべしとは思はざりしを

右の「が」「に」「を」は前項に擧げたるものと異り、用言若くは活用連語にのみ續くものにて、體言には續かず、前の事と後の

事と相背く場合に用ゐる。

〔五七〕助詞には活用なけれども、活用語より助詞につゞくには、何の活用形よりつゞくといふ定あり。「花咲けども」「山の高きを」「論ぜざるを得ず」とはいへども、「花咲かども」「山の高しを」「論ぜざりを得ず」とはいはざるが如し。かくの如き連結の法も國民は自然に感得するを以て、誤用する場合は極めて尠し。

（注意）〔五四〕に擧げたるものはすべて連體形より連るものにてその數最も多し。

左に誤り易きもの一二を注意せん。

〔五八〕歸りたりといふ
見たる人なしとぞ。

〔五四〕に擧げたる「と」は物を並べて比較するものにて、連體形に連れども、その他のとは右の例の如く終止形につづくものとす。然るに之を誤りて、「歸りたるといふ」「見たる人なきとぞ」の如く連體形に用ゐることあり。

（注意）附錄文法許容に關する事項第十二項を參照せよ。

〔五九〕ありやなしや
汝は日本國民に非ずや。

〔五四〕に擧げたる「や」は感動の「や」にして、これは疑問又は反語の「や」なり。この場合にはすべて右の例の如く終止形よりつゞくものとす。然るに之を誤りて「あるやなきや」「汝は日本國民に非ざるや」の如く連體形に用ゐることあり。

（注意）（一）疑問の助詞「か」は連體形よりつゞくものと知るべし。

（二）いつ、幾許、何處の如き疑問の詞上に在る時はか。の助詞を用ゐる定なり。

（注意）附錄文法許容に關する事項第十項及第十四項を參照せよ。

練習十三、左の用言、活用連語に接續の誤あらば正せ。〔許容あるものは其旨をことわるべし〕

（イ）數日の旅行に過ぎざりしも、得るところは少からざりしと信ず。

（ロ）八百と十五との差は幾何なるや。

（ハ）少年の時學ばざれば老年に至りて悔ゆるとも及ぶべからず。

（ニ）人は權利を有するとともに義務をも有す。

（ホ）歲月は流る如し。

（ヘ）人と禽獸との區別は言語を有すと有せざるとに在りと論する人あり。

（ト）出席せるや否やを檢して後問題を與ふべし。

（チ）昔の行列の繪などに見ゆる美き傘に、金紙の飾つけたるを從者に持たすもあり。

（リ）戰路に添へる電信線は悉く切斷せられて、北京天津間の交通は通州を通過する一條の電線を存すのみ。

第十五章　用語の慣用語句

〔六〇〕知るに足る。

知るを得
知るといふべし
知らんとす
知らんと欲す
知るべければなり
知らしむるにあり
知らしむるを要す
知りたりといふ
知らざるに非ず
知るべくもあらず
知らざるのみならず

右は用言、活用連語が助詞に連りて、更に又下の用言、活用連

語に移れるものなり。

〔六一〕知らざる所なり
知らしむること勿れ
知ること能はず
知るべきこと多し
知らしめざることならん
知らしむべからざる所以なり

右の用言、活用連語は體言に連りて、更に又下の用言、活用連語に移れり。

〔六二〕知る能はざるなり

右は用言に連りて、他の活用連語に移れり。

右等の例の如く用言、活用連語は助詞體言又は他の用

言に連りて更に他の用言活用連語に移りゆくことあり。かくして能力、命令、願望等のいひまはし方一層自在になるなり。

〔六三〕未來の意味より、推量の法の意味に轉じたる連語を、更に反語の意味に用ゐること多し。それには上に適當なる副詞、代名詞等を添へ、下には感歎の助詞やを添ふること多し。

誰か之を知らんや。
豈に知らざらんや。
安ぞ知らんや。
豈に知らざるべけんや。

右の如きは日常の文章に最も普通に用ゐらるゝものなれば、よくその意義と用法とを知り置くべし。

練習十四、右の活用連語を口語にいひ換へよ。

(イ) 國民の義務を果さゞるべからず。
(ロ) 蓋し測らざるべからざるものあらん。
(ハ) 豈に寒心せざるべけんや。
(ニ) 何ぞ謬れるの甚しきや。
(ホ) 惡まずんばあらざるなり。
(ヘ) 最も恐るべきものにあらずや。
(ト) 志望を成し遂ぐること能はざりき。
(チ) 亦以て其尋常ならざるを知るべし。
(リ) 見るものとして教訓ならざるはなし。

第十六章　體言と用言との關係——主語——述語——客語

〔六四〕　山崩る　　柿落つ

右の文にて山、柿は崩るゝもの、落つるものにして、崩る、落つの動作は山、柿のなす所なり。地震にて崩るゝか、地雷火にて崩るゝか明瞭ならざれども、「崩る」といふ動詞のあらはす意味は單純に山の崩れたる現象を示すのみ。柿の落つるも、風にて落ちたるか、猿に落されたるか、原因不明なれども「落つ」といふ動詞にて柿の落つる現象を示せり。かくの如く動詞の示す動作が、動作者のみにて成立する動詞を名けて自動詞といふ。

この場合に、動作者として用ゐられたる體言を、その動詞に對して主語といひ、その動詞を主語に對して述語といふ。

〔六五〕　猿(柿を)落す　　地震(山を)崩す

右の文にて「落す」「崩す」といへば、「猿落す」「地震崩す」とのみいふときは、何を落すか、何を崩すか明瞭ならず。「柿を」「山を」といひて意味始めて完し。かくの如く主語、述語の外に他の何をといふ語を要する動詞を名けて、他動詞といふ。この場合に「何を」にてあらはされたる體言を客語といふ。「落す」「崩す」の如き動作は、動作者(主語)の外に其動作の及ぶ目的物(客語)なければ動作の成立することなし。

〔六六〕旅人　路を　問ふ

父　褒美を　與ふ

右の二文にて旅人、父は主語なり。問ふ　與ふ　は述語、路、褒美は客語なり。然れども「問ふ」「與ふ」の動作は、問はるゝ人、與へらるゝ人なければ成立すべからず。かくの如き動作は動作者(主語)と動作の目的物(客語)との外に動作を仕向けらるゝ人ありて、動作始めて成立するなり。

旅人　里人に　路を　問ふ

父　子に　褒美を　與ふ

「里人」「子」を加へて動作の關係始めて明瞭なり。故に問ふ與ふの如き動詞は第一客語の外尚第二の客語を要するものなり。

他動詞には二つの客語を要するものあり。

〔六七〕自動詞他動詞には、同一語原より出でゝ其活用を異にするものあり。例へば、

家燒く(下二段)　餅を燒く(四段)　雨やむ(四段)　運動を止む(下二段)

〔六八〕同一の動詞にして或時は他動に用ゐられ、或時は自動に用ゐらるゝものあり。例へば

花開く(四段)　戸を開く(四段)

練習十五、左の動詞の自他を辨ぜよ

沈む　分く　分つ　戰ふ　整ふ　知る　散る

流る　流す　宿る　宿す　燒く　退く　攻擊す

主張す　立つ　敗北す　出發す　評す

練習十六、左の自動詞に對する他動詞を擧げよ。

見ゆ　亡ぶ　起く　聞ゆ　倒る　終る　始る

練習十七、左の他動詞中、第二客語を要するものを指摘せよ。

敎ふ　問ふ　願ふ　與ふ　思ふ　見る　食ふ　加ふ

第十七章　補語

〔六九〕

(イ)造營成る。　雀蛤となる。

(ロ)偉人は大業を成ず。　湯水になる。

天皇憲法を定む。　氷を水になす。

華盛頓を大統領と定む。

(イ)の成るは自動詞にして主語のみにて動作の成立すること上段の例に照し見て明なり。然れども下段の例を見れば雀なる、湯なるにては何になるか明瞭ならず。蛤と、水にといひて始めて明瞭なり。(ロ)の成ず、定むは他動詞にして主語と客語とにて動作の成立するものなれども、下段の例にては氷を、華盛頓をのみにては何になしたるか、何と定めたるか明白ならず。水に、大統領とといひて始めて明瞭になるなり。

かくの如く用ゐられたる語を補語といふ。故に自動詞に

も他動詞にも、補語を取るものありと知るべし。

（注意）（一）〔六六〕の問ふ、與ふの如きは、文の都合により第二客語のあらはれぬ事あれども、實際に於ては客語なくては其動作成立せぬものなり。茲にいふ爲る、成ずの如きは上段の例に照して或場合には、他の語なくして動作の成立すること明なり。但し下段の場合に於ては或語を取りて始めて其動作の意を完くす。かくの如き動詞を補語を採る動詞といふ。

（二）補語に就ては文の構造を學ぶに方りて尚知るところあるべし。

〔六〇〕余は六時に起きたり

今日東京に着す

右の如く時間或は場所をいふものは亦同じくにの助詞を伴へり。これは副詞の功用をなすものにて補語にあらず。又もとより客語にもあらず。

〔六一〕秋草爛熳と咲く

櫻花は奇麗に咲きたり

右の爛熳と、奇麗には形容動詞にして補語にあらず。又もとより客語にもあらず。

〔六二〕趣味自然に生ず

光秀蹶然として立つ

右の自然に蹶然とは副詞にして補語にあらず。又もとより客語にもあらず。

練習十八、左の文より客語補語を指摘せよ。

(イ) 中江藤樹先生は俗稱を與右衞門といへり。

(ロ) 荷物を東京より京都まで輸送す。

(ハ) 舟或は右に傾き或は左に傾く。

(ニ) 二月十一日を紀元節と定む。

(ホ) 信用を得んと欲せば時間を堅く守らざるべからず。

中等教科 明治文典(再訂)卷之二終

附錄　三、文法上許容に關する事項

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五、「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス

周旋サス
賣買サス

六、「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例
罪サル
評サル
解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例
最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例
唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例
花ヲ見ルノ記
學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例
有ルヤ
面白キヤ
父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及、受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルルトモ

强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及、時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ

喇弄セラルヽト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトヅ

十三、語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書㊦ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳㊦ヲ讀ムベシ

十四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

十五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ スレドモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

十六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルルモノハ德川時代國學者ノ研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

活用連語表第一

活用連語表第一

相	法	肯定	否定
通常ノ相	通常ノ法	現在 讀ム 現在完了 讀ミタリ 過去 讀ミキ 過去完了 讀ミタリキ 未來 讀マン 未來完了 讀ミタラン	現在 讀マズ 現在完了 過去 讀マザリキ 過去完了 未來 讀マザラン 未來完了
通常ノ相	推量ノ法	現在 讀ムベシ 讀ムナルベシ 現在完了 讀ミタルサルベシ 過去 讀ミシナルベシ 過去完了 讀ミタリシナルベシ	現在 讀マザルベシ 讀マザルナルベシ 現在完了 過去 讀マザリシナルベシ 過去完了
通常ノ相	義務能力ノ法	現在 讀ムベシ 過去 讀ムベカリキ 未來 讀ムベカラン(ベケン)	現在 讀ムベカラズ 過去 讀ムベカラザリキ 未來 讀ムベカラザラン
通常ノ相	義務(二重打消ノ)	現在 讀マザルベカラズ 過去 讀マザルベカラザリキ 未來 讀マザルベカラザラン	
通常ノ相	命令ノ法	現在 讀ムベシ	現在 讀ムベカラズ
受身ノ相	通常ノ法	現在 讀マル 現在完了 讀マレタリ 過去 讀マレキ 過去完了 讀マレタリキ 未來 讀マレン 未來完了 讀マレタラン	現在 讀マレズ 現在完了 過去 讀マレザリキ 過去完了 未來 讀マレザラン 未來完了
受身ノ相	推量ノ法	現在 讀マルベシ 讀マルルナルベシ 現在完了 讀マレタルナルベシ 過去 讀マレシナルベシ 過去完了 讀マレタリシナルベシ	現在 讀マレザルベシ 讀マレザルナルベシ 現在完了 過去 讀マレザリシナルベシ 過去完了
受身ノ相	義務能力ノ法	現在 讀マルベシ 過去 讀マルベカリキ 未來 讀マルベカラン(ベケン)	現在 讀マルベカラズ 過去 讀マルベカラザリキ 未來 讀マルベカラザラン
受身ノ相	義務(二重打消ノ)	現在 讀マレザルベカラズ 過去 讀マレザルベカラザリキ 未來 讀マレザルベカラザラン	
受身ノ相	命令ノ法	現在 讀マルベシ	現在 讀マルベカラズ
使役	通常ノ法	現在 讀マシム 現在完了 讀マシメタリ 過去 讀マシメキ 過去完了 讀マシメタリキ 未來 讀マシメン 未來完了 讀マシメタラン	現在 讀マシメズ 現在完了 過去 讀マシメザリキ 過去完了 未來 讀マシメン 未來完了
使役	推量ノ法	現在 讀マシムベシ 讀マシムルナルベシ 現在完了 讀マシメタルナルベシ 過去 讀マシメシナルベシ 過去完了 讀マシメタリシナルベシ	現在 讀マシメザルベシ 讀マシメザルナルベシ 現在完了 過去 讀マシメザリシナルベシ 過去完了

使役ノ受身相

	命令法	義務(二重打消)	能力法	推量法	通常法
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラレザルベカラズ	讀マシメラルベカラザリキ(ベケン)	讀マシメラルベシ	讀マシメラル
現在完了		讀マシメラレザルベカラザラン		讀マシメラルベシ	讀マシメラレタリ
過去			讀マシメラレザリキ	讀マシメラルナルベシ	讀マシメラレキ
過去完了			讀マシメラレタリキ	讀マシメラレシナルベシ	讀マシメラレタリキ
未來			讀マシメラルベカラン	讀マシメラレン	讀マシメラレン
未來完了				讀マシメラレシナルベシ	讀マシメラレタラン

使役相

	命令法	義務(二重打消)	能力法	推量法	通常法
現在	讀マシムベシ	讀マシメザルベカラズ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシム
現在完了		讀マシメザルベカラザラン	讀マシムベカリキ	讀マシムルナルベシ	讀マシメタリ
過去			讀マシムベカリキ(ベケン)	讀マシメタルベシ	讀マシメキ
過去完了				讀マシメシナルベシ	讀マシメタリキ
未來				讀マシメン	讀マシメン
未來完了				讀マシメシナルベシ	讀マシメタラン

受身相

	命令法	義務(二重打消)	能力法	推量法	通常法
現在	讀ムベシ	讀マレザルベカラズ	讀マルベシ	讀マルベシ	讀マル
現在完了		讀マレザルベカラザラン	讀マルベカリキ(ベケン)	讀マルルナルベシ	讀マレタリ
過去				讀マレタルナルベシ	讀マレキ
過去完了				讀マレシナルベシ	讀マレタリキ
未來					讀マレン
未來完了				讀マレシナルベシ	讀マレタラン

使役ノ受身相

	命令法	義務(二重打消)	能力法	推量法	通常法
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラレザルベカラズ	讀マシメラルベカラザリキ(ベケン)	讀マシメラルベシ	讀マシメラル
現在完了		讀マシメラレザルベカラザラン		讀マシメラルナルベシ	讀マシメラレタリ
過去				讀マシメラルベシ	讀マシメラレキ
過去完了				讀マシメラレシナルベシ	讀マシメラレタリキ
未來					讀マシメラレン
未來完了				讀マシメラレシナルベシ	讀マシメラレタラン

使役相

	命令法	義務(二重打消)	能力法	推量法	通常法
現在	讀マシムベシ	讀マシメザルベカラズ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシム
現在完了		讀マシメザルベカラザラン	讀マシムベカリキ(ベケン)	讀マシムルナルベシ	讀マシメタリ
過去				讀マシメタルベシ	讀マシメキ
過去完了				讀マシメシナルベシ	讀マシメタリキ
未來					讀マシメン
未來完了				讀マシメシナルベシ	讀マシメタラン

受身相

	命令法	義務(二重打消)	能力法	推量法	通常法
現在	讀ムベシ	讀マレザルベカラズ	讀マルベシ	讀マルベシ	讀マル
現在完了		讀マレザルベカラザラン	讀マルベカリキ(ベケン)	讀マルルナルベシ	讀マレタリ
過去				讀マレタルナルベシ	讀マレキ
過去完了				讀マレシナルベシ	讀マレタリキ
未來					讀マレン
未來完了				讀マレシナルベシ	讀マレタラン

使役ノ受身相

	命令法	義務(二重打消)	能力法	推量法	通常法
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラレザルベカラズ	讀マシメラルベカラザリキ(ベケン)	讀マシメラルベシ	讀マシメラル
現在完了		讀マシメラレザルベカラザラン		讀マシメラルナルベシ	讀マシメラレタリ
過去				讀マシメラルベシ	讀マシメラレキ
過去完了				讀マシメラレシナルベシ	讀マシメラレタリキ
未來					讀マシメラレン
未來完了				讀マシメラレシナルベシ	讀マシメラレタラン

通常ノ相

ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	義務（二重ノ打消）
未來 詳ナラン	現在 詳ナルベシ 過去 詳ナリシナルベシ	現在 詳ナルベシ 過去 詳ナルベカリキ 未來 詳ナルベカラン（ベケン）	現在 詳ナラザルベカラズ
未來 詳ナラザラン	現在 詳ナラザルベシ 過去 詳ナラザリシナルベシ	現在 詳ナルベカラズ 過去 詳ナルベカラザリキ 未來 詳ナルベカラザラン	

使役ノ相

通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	義務（二重ノ打消）
現在 詳ナラシム 現在完了 詳ナラシメタリ 過去 詳ナラシメキ 過去完了 詳ナラシメタリキ 未來 詳ナラシメン 未來完了 詳ナラシメタラン	現在 詳ナラシムルナルベシ 過去 詳ナラシメシナルベシ	現在 詳ナラシムベシ 過去 詳ナラシムベカリキ 未來 詳ナラシムベカラン（ベケン）	現在 詳ナラシメザルベカラズ
現在 詳ナラシメズ 過去 詳ナラシメザリキ 未來 詳ナラシメザラン	現在 詳ナラシメザルナルベシ 過去 詳ナラシメザリシナルベシ	現在 詳ナラシムベカラズ 過去 詳ナラシムベカラザリキ 未來 詳ナラシムベカラザラン	

助動詞の学習法

助動詞は動詞・形容詞・形容動詞・名詞と結び付いて用言の活用を変化させる付属語である。
助動詞は一語で一つの意味を表わす場合と二つ以上の意味を表わす場合とがあるから一つ一つ
助動詞を学習する時は意味を明らかにすると共に活用を明らかにすることが重要である。

助動詞

(レル)(ラレル)人ニ使ハレル　(ラ)人ニ使ハラル　(ラレル)人ニ使ハレル　ラ人ニ使ハラル

◎受身

可(レル)作ラレル　人ニ作ラル　(ラレル)出来ル　ラ出来ル

◎可能

可(レル)出ラレル　出ル　(ラ)出ル　ラ出ル

◎自然(可能)

学校(レル)先生ガ生徒ヲ呼ビ　(ラレル)先生ガ生徒ヲ呼ブ　(ラ)先生ガ生徒ヲ呼ブ　(ナイ)先生ガ生徒ヲ呼ブ

◎尊敬

使役(サセル)上司ガ部下ニ作ル　(サセル)先生ガ生徒ニ作ル　(サセル)上司ガ部下ニ作ル

(ス)父ガ子ニ買ッテ　(ス)右ニ行キ　(ス)右ニ行キ　(ス)大勢ノ人ガ

自然(ル)行キ　(ル)行キ　(ル)行キ　(ル)行キ

山宗故（セ）行幸あらせられる（セす）宮城を出ざせられる（一め）即位の禮を行ひ給ふ

活用連語表第二

通常

推量法	未來 詳ナラザラン	現在 詳ナラザルベシ	未來 詳ナラザラン	現在 詳ナラザルベシ
過去	詳ナラザリシナルベシ			

活用連語表第二

(一) 否定式ヨリ使役相ニナレル動詞ノ活用連語(三三節注意參照)

相	法／式	肯定	否定
通常ノ相	通常ノ法	現在 讀マザラシム 現在完了 讀マザラシメタリ 過去 讀マザラシメキ 過去完了 讀マザラシメタリキ 未來 讀マザラシメン 未來完了 讀マザラシメタラン	現在 詳ナラズ 過去 詳ナラザリキ 未來 詳ナラザラン
	推量ノ法	現在 讀マザラシムベシ 讀マザラシムルナルベシ 讀マザラシメタルナルベシ 完了 讀マザラシメシナルベシ 過去完了 讀マザラシメタリシナルベシ	現在 詳ナルベシ 過去 詳ナルベカリキ 未來 詳ナルベカラン(ベケン)
	義務 能力ノ法	現在 讀マザラシムベシ 過去 讀マザラシムベカリキ 未來 讀マザラシムベカラン(ベケン)	現在 詳ナラザルベカラズ
	命令法	讀マザラシムベシ	
受身ノ相	通常ノ法	現在 讀マレザラシム 現在完了 讀マレザラシメタリ 過去 讀マレザラシメキ 過去完了 讀マレザラシメタリキ 未來 讀マレザラシメン 未來完了 讀マレザラシメタラン	現在 詳ナラザルベカラズ 過去 詳ナラザリキ 未來 詳ナラザラン
	推量ノ法	現在 讀マレザラシムベシ 讀マレザラシムルナルベシ 現在完了 讀マレザラシメタルナルベシ 過去 讀マレザラシメシナルベシ 過去完了 讀マレザラシメタリシナルベシ	現在 詳ナラザルベシ 過去 詳ナラザリシナルベシ
	義務 能力ノ法	現在 讀マレザラシムベシ 過去 讀マレザラシムベカリキ 未來 讀マレザラシムベカラン(ベケン)	現在 詳ナラザルベカラズ 過去 詳ナルベカラザリキ 未來 詳ナルベカラザラン
	命令法	現在 讀マレザラシムベシ	
使役相	通常ノ法	現在 詳ナラシム 現在完了 詳ナラシメタリ 過去 詳ナラシメキ 過去完了 詳ナラシメタリキ 未來 詳ナラシメン 未來完了 詳ナラシメタラン	現在 詳ナラシメズ 過去 詳ナラシメザリキ 未來 詳ナラシメザラン
	推量ノ法	現在 詳ナルベシ 過去 詳ナリシナルベシ	現在 詳ナルベカラズ 過去 詳ナルベカラザリキ 未來 詳ナルベカラザラン
	義務 能力ノ法	現在 詳ナラザルベカラズ	
	義務(二重ノ打消)		

注意

(1) この表に擧げたる連語は使役の相としてはシムに連るのみにてス、又はサスに連る事なし。

(2) この表に擧げたる連語は完了時のマに續かず。

(3) 指定の助動詞ナリ、タリ(第十二章參照)はこの表の(二)の如き活用連語をなすものと知るべし。

(4) ベカリより使役になれる活用連語は(一)に準じて知るべし。

(二) 形容動詞ノ活用連語(第十章參照)

(二) 形容動詞ノ活用連語（第十章參照）

相／法／式	通常ノ相						使役ノ相			
	通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	義務（二重ノ打消）	通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	義務（二重ノ打消）
肯定	現在 詳ナリ 過去 詳ナリキ 未來 詳ナラン	現在 詳ナルベシ 過去 詳ナリシナルベシ	現在 詳ナルベカリキ 過去 詳ナルベカラン（ベケン）	現在 詳ナラズルベカラズ	現在 詳ナラシム 現在完了 詳ナラシメタリ 過去 詳ナラシメキ 過去完了 詳ナラシメタリキ 未來 詳ナラシメン 未來完了 詳ナラシメタラン	現在 詳ナラシムルナルベシ 過去 詳ナラシメシナルベシ	現在 詳ナラシムベシ 過去 詳ナラシムベカリキ 未來 詳ナラシムベカラン（ベケン）	現在 詳ナラシメザルベカラズ
否定	現在 詳ナラズ 過去 詳ナラザリキ 未來 詳ナラザラン	現在 詳ナラザルベシ 過去 詳ナラザリシナルベシ	現在 詳ナルベカラズ 過去 詳ナルベカラザリキ 未來 詳ナルベカラザラン		現在 詳ナラシメズ 過去 詳ナラシメザリキ 未來 詳ナラシメザラン	現在 詳ナラシメザルナルベシ 過去 詳ナラシメザリシナルベシ	現在 詳ナラシムベカラズ 過去 詳ナラシムベカラザリキ 未來 詳ナラシムベカラザラン	

通常ノ相

通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	義務（二重ノ打消）
現在 讀マレザラシム 過去 讀マレザラシムキ 未來 讀マレザラシメン	現在 讀マレザラシムベシ 現在完了 讀マレザラシムルナルベシ 過去 讀マレザラシメシナルベシ 過去完了 讀マレザラシメタリシナルベシ	現在 讀マレザラシムベシ 過去 讀マレザラシムベカリキ 未來 讀マレザラシムベカラン（ベケン）	現在 讀マレザラシムベシ

受身ノ相

通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	命令ノ法
現在 讀マレザラシム 現在完了 讀マレザラシメタリ 過去 讀マレザラシメキ 過去完了 讀マレザラシメタリキ 未來 讀マレザラシメン 未來完了 讀マレザラシメタラン	現在 讀マレザラシムベシ 現在完了 讀マレザラシムルナルベシ 過去 讀マレザラシメシナルベシ 過去完了 讀マレザラシメタリシナルベシ	現在 讀マレザラシムベシ 過去 讀マレザラシムベカリキ 未來 讀マレザラシムベカラン（ベケン）	現在 讀マレザラシムベシ

通常ノ相

通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	命令ノ法
過去 讀マザラシメキ 過去完了 讀マザラシメタリキ 未來 讀マザラシメン 未來完了 讀マザラシメタラン	現在 讀マザラシムベシ 現在完了 讀マザラシムルナルベシ 完了 讀マザラシメタルナルベシ 過去完了 讀マザラシメタリシナルベシ	現在 讀マザラシムベシ 過去 讀マザラシムベカリキ 未來 讀マザラシムベカラン（ベケン）	讀マザラシムベシ

注意

(1) この表に擧げたる連語は使役の相としてはシムに連るのみにてス、又はサスに連る事なし。

(2) この表に擧げたる連語は完了時のマに續かず。

(3) 指定の助動詞ナリ、タリ（第十二章參照）はこの表の(二)の如き活用連語をなすものと知るべし。

(4) ベカリより使役になれる活用連語は(一)に準じて知るべし。

明治三十七年十二月十八日印刷
明治三十七年十二月十八日發行
明治三十八年二月廿一日訂正再版印刷
明治三十八年三月廿一日訂正再版發行
明治三十八年十二月廿四日印刷
明治三十八年十二月廿五日發行
明治三十九年十一月十日訂正五版印刷
明治三十九年十一月十日訂正改版發行
明治三十九年十一月十日訂正再版印刷
明治四十年二月十七日訂正再版發行
明治四十年六月九日再訂印刷
明治四十年十二月十日再訂發行
明治四十年十二月十七日訂正再版印刷
明治四十年十二月十七日訂正再版發行

著作權所有
HAGA 賀芳

（不許漢譯）

著作者　賀芳矢一
東京市神田區裏神保町九番地
發行兼印刷者　合資會社　冨山房
同所　合資會社冨山房社長
代表者　坂本嘉治馬
發行所　東京神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
電話本局一〇三六、本局四一三〇番
振替口座東京五〇一番

中等教科
明治文典
（再訂）
卷之一　正價金貳拾三錢
卷之二　正價金貳拾三錢
卷之三　正價金貳拾三錢

（印刷所　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　新井電新堂）

廣島師範學校
林彝